

Title	黄震の『春秋』解釈
Author(s)	神林, 裕子
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 1997, 31, p. 15-27
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/4133
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

黄震の『春秋』解釈

神林裕子

一、はじめに

南宋の朱子学者、黄震（一一二一—一一八〇）は、朱子に『春秋』および『礼記』に対する注釈書がないことを惜しみ、朱子に代わって両経書の注解を撰し、これを『黄氏日抄』九十七卷中に収めた。『黄氏日抄』の他の篇が断片的な節記であるのに対して、『読礼記』十六卷、および『読春秋』七卷は、全経文について注解を施しており、それ自体が完成された注釈書の体裁を採っている。例えば『読春秋』の隠公元年の記事に次のようにある。

秋七月、天王使宰咺来帰惠公仲子之贈。咺、呼阮反。贈、芳鳳反。

仲子者、魯惠公再娶之夫人也。伊川謂、不曰夫人曰惠公仲子者、妾称也。穀梁謂、礼贈人之妾不可。凡皆正論也。木訥謂、魯以夫人赴故王來贈云。（『黄氏日抄』卷七）

「読春秋」は、先ず初めに経文を挙げ、その下に、双行で反切を記す。次に一格下げて、その経文に対する諸説

を列挙し、場合によつては、最後に「愚按」などとして、自説を述べる。このように「読春秋」は、あくまでも「春秋経」を解することを目的としているため、いわゆる「春秋三伝」については、とりたてて注解していない。ただ経文に対する注解として、「三伝」の一部が引用されることはある。なお「読春秋」が挙げる経文は、すべて『春秋左氏伝』に拠るもので、他の「二伝」と経文に異同がある場合は、注解の最後にその旨を記している。

ちなみにこれを「読礼記」と比べると、「読春秋」は、注釈書としての体裁が「読礼記」ほどには整っていない。例えば「読春秋」の序文には、「読礼記」の序文に示されるような、明確な編集方針が打ち出されていない。また「読春秋」は、「読礼記」のように、語から句へ、句から文へと段階を踏んで注解しておらず、中には、語注もなしに節記風の評論のみをいきなり記している場合もある。また「読礼記」には、諸説を引用する際に、単に諸説を並べるのではなく、自己の見解に基づいてこれを切り貼りし、前後に矛盾を含まない一つの注解にまとめ上げるなどの工夫が見られる。あるいは「読春秋」が未定稿のままであったとも考えられるが、その経緯についての考証は困難である。なお「読礼記」について詳しくは、拙稿「黄震の経学——「読礼記」における注釈の態度」（『待兼山論叢（哲学篇）』第二十七号、平成五年）を参照されたい。

さて本稿は、この「読春秋」の宋代春秋学における位置付けについて検討を加えることを目的としている。そこで例えば『経義考』巻一百四十二を見ると、明人、姚福（字は世昌）は、「読春秋」と「読礼記」とについて、次のような評価を与えている。

其の（黄震の）後、程端学に『春秋本義』有り、陳滯に『礼記集説』有るも、皆之（すなわち「読春秋」およ

び「読礼記」に過ぐることも能わず。永樂の初め、『五經大全』を修むるに、諸臣、皆未だ『黄氏』日抄を見ず。故に一として取る所無し。

ではここで「読春秋」の比較の対象として引き合いに出される程端学の『春秋本義』とは、どのような注釈書なのであるうか。次章では、この点について明らかにするとともに、これを手がかりに黄震の「読春秋」が持つ特色を見い出したい。

二、黄震「読春秋」と程端学「春秋本義」と

『春秋本義』の撰者である程端学の事跡については、『四庫全書總目提要』（以下『四庫提要』と略記）巻二十八の『春秋本義』に対する解題に次のようにある。程端学、字は時叔、積齋と号する。慶元（浙江省）の人。至治元年（一三二一年）に進士に挙げられ、国子助教・翰林国史院編集官に官する。また『元史』巻一百九十の「韓性伝」中にも記載があり、これに拠れば程端学は、兄の程端礼とともに王応麟の弟子である鄞県（浙江省）の史蒙卿に師事している。実はこの史蒙卿と黄震とは、全くの無関係ではない。史蒙卿は、陸象山の学が盛んであった四明山一带において、もっぱら朱子学を奉じた人物であり、『宋元学案』巻八十七は、これを慈溪（浙江省）の黄震と並び称している。特に王梓材の案語に拠れば、梨洲本『宋元学案』は、それぞれを「四明朱門学案一」、「四明朱門学案二」と呼んでいたようである。また全祖望の「序録」に次のようにある。

四明の史氏は皆 陸学なり。静清（史蒙卿）に至りて始めて改めて朱〔熹〕を宗とす。……然れども嘗て聞く

ならず、深寧（王応麟）〔が〕静清の『易』を説くを喜ばざるは、其の奇を嗜むを以てすればなり。則ち〔史蒙卿は〕未だ必ずしも尽くは朱〔熹〕に同じからざるに似たり。其の伝うる所は程畏斎（程端礼）兄弟た為り。則ち〔程兄弟は〕朱〔熹〕に純なる者なり。

このことから、『春秋本義』が「読春秋」の比較の対象とされる理由として、『春秋本義』の撰者である程端学の活躍した時期や地域が、黄震のそれにきわめて近いこと、および陸学に染ることなく、朱子学の復興を唱えたという学問的背景も非常に似ていることが考えられる。

また「読春秋」と『春秋本義』との注解方法には、次のような共通点も見られる。先ず注解の大部分が諸説の引用であり、自説を述べる箇所が少ないこと、また引用するにあたって広く諸説を集めていること、またその冒頭に「く氏曰」と姓氏を明記していること、また古今の注釈を取りまぜて採用していることなどが挙げられる。なお『春秋本義』の冒頭には、参考書目およびその撰者が列举されており、これに拠れば、『春秋本義』は、「春秋三伝」以下、計百七十六家の説を集めていることが分る。『四庫提要』巻二十八に拠れば、この百七十六家の内の約九割が、既に佚しており、現在、『春秋本義』によってしか見ることができない。なるほど「読春秋」も諸説を多く引いているが、その数は、『春秋本義』にはるかに及ばない。

さてこの『春秋本義』が採用する諸説の中には、黄震の「読春秋」ももちろん含まれている。またそれだけでなく、『春秋本義』「綱領」には、「読春秋」の序文も引かれている。さらにまた『春秋本義』の自序の中にも黄震の名前が挙っており、次のように述べる。

此れより後、諸儒 訓釈多しと雖も、…：常に同然として一辞。聖人の明白正大の經をして反て晦昧詭怪の説の若くならしむるは、歎くべし。已に幸いにして啖叔佐（助）・趙伯循（匡）・陸伯冲（淳）・孫大山（復）・劉原父（敞）・葉石林（夢得）・陳岳氏なる者、出でて三伝の非を辨ずるを以て、其の自ら説を為す所に至る有るも、又た褒貶凡例の敞を免れず。復た呂居仁（本中）・鄭夾漈（樵）・呂朴郷（大圭）・李秀巖（壽）・戴岷隱（溪）・趙木訥（鵬飛）・黄東発（震）・趙浚南（孟何）の諸儒を得て、傑然として陋習を掃くも、未だ詳を致すに暇あらず。端学の愚、此れを病むこと久し。竊に嘗て諸伝の經に合するものを采輯し、本義と曰いて間ま己が意を其の末に附す。

程端学は、唐末から元初に至る春秋学の流れを大きく二つに分け、前半期にはもっぱら「春秋三伝」に対する批判が行なわれ、後半期にはこれに加えて「褒貶」「凡例」の説から抜け出すことができたとする。ただいづれの注釈書も広く諸説に当たっていない点が残せられるとして、自ら『春秋本義』を撰したのである。なお程端学が、この春秋学の流れの中に胡安国などの「復讐論」を主とする一派を加えていない点は、その特徴の一つと言えよう。

要するに『春秋本義』は、自序に挙げる諸注釈書の趣旨に共鳴し、かつそれらに共通して見られる欠点を克服しようとして成立したと言える。また中でも「読春秋」とは、その注解方法において、既に述べたような共通点がいくつかあり、程端学が先の自序に挙げる諸注釈書の中では、「読春秋」の注解方法が最も『春秋本義』に近い。もちろんこの注解方法は、けっして「読春秋」の独創ではないが、あるいは『春秋本義』が積極的にこれに倣ったとも考えられる。言うなれば、『春秋本義』は「読春秋」に準じた注釈書である。ところがそれにもかかわらず、先の姚

福(本稿第16頁)が、『春秋本義』をもって「読春秋」に及ばないとする根拠はどこにあるのか。この点について検討する手がかりとして、『四庫提要』卷二十八の『春秋本義』に対する評価を見ると、次のようにある。

經に依りて説を附するに、群言を類次し、間ま亦た綴るに案語を以てす。『左伝』の事蹟は即ち衆説の中に參錯し、体例頗る糅雜を爲す。其の大旨は、仍お常事は書さず、貶有りて褒無しの義を主とす。故に徵引する所は大抵、孫復以後の説なり。往往にして繳繞支離、横いままに推衍を加え、事に其の貶する所以を求む。

この評価は決して高いとは言えない。これに拠れば、『春秋本義』が種々の批判を受ける主な原因は、『春秋本義』が諸説を数多く引くため、その体裁が繁雜になつてゐること、また北宋の孫復に始まる「有貶無褒」という解釈の仕方を取り入れているため、しばしば牽強附会の説をなしていることにあるようである。また『四庫提要』は、隱公二年の「九月、紀の裂繻来りて女を逆う」(『春秋本義』には「裂繻」ではなく「履綸」とある)に対する『春秋本義』の解釈についても批判的である。『春秋本義』は、呂大本の「春秋におけるや内女の帰ぐは其の礼の備わらざる者なれば、必ず謹んで之を書す」という説を受けて、次のように述べる。なお「裂繻」は紀國の大夫である。

愚謂えらく、逆うるに當に命卿を使とすべし。當に大夫を使とすべからず。紀は大夫を以て国母を逆う。魯も亦た礼を以て之を卻くる能わず。故に書して以て戒を示すなり。(『春秋本義』卷一)

『春秋本義』は、紀國が魯國の公女を迎えるに当たつて、命卿を使わさなかつたとして非難している。またこれに続く「冬十月、伯姬 紀に帰ぐ」においても、迎える側だけでなく、迎えられる側である魯國、ひいては當の伯

姫に対しても、その非礼を受け入れたとして非難している。この解釈に対して『四庫提要』は、たしかに「履綸は命卿である」と反論できる証拠もないが、程端字が言うように「命卿でない」という証拠もないとして批判している。では、「読春秋」はこの記事をどのように解釈しているであろうか。

此れ紀の 昏を魯に求むるなり。説く者、皆謂えらく親迎せざるを譏ると。(程)伊川(頤)曰く、諸侯 親迎するとき館する所に迎う。豈に宗廟社稷を委ねて遠く他国に適き以て婦を逆うる者有らんやと。戴岷隱(溪)も亦た謂えらく、文王 親迎せし時、世子た為り、韓侯 親迎せしときも亦た入覲に因ると。然らば則ち凡そ皆「事の実に因りて書すのみ」。譏貶有るに非るなり。(『黄氏日抄』卷七)

両者の説を比較すると、『春秋本義』はひたすら「有貶無褒」の説に固執しているが、「読春秋」は先入観に捕われない素直な解釈を行ない、その結果、ここには「貶」は無いとしている。なおここに挙げる以外にも、黄震が賢者と称する人物が、『春秋本義』では批判されるなど、両者の解釈はしばしば食い違っている。では黄震のこのような解釈を生み出す思想的淵源はどこにあるのか。それは「事の実に因りて書すのみ」の一句に言い尽くされており、これが黄震の『春秋』理解の基礎ともなっている。「読春秋」の序文に次のようにある。

蓋し方まきに是の時、王綱 解紐し、篡奪 相い尋ぐ。孔子 其の位を得ずして、以て其の権を行ない、是に於いて史記を約して『春秋』を修む。「事に随いて直に書せば」、乱臣賊子 其の罪を逃るる所無く、一王の法 以て明らけし。(『黄氏日抄』卷七)

つまり黄震は、「君を弑し父を弑するものは書す。世子を殺し大夫を殺すものは書す。其の邑を以て叛き其の邑を以て来奔するものは書す」（『読春秋』序文）といった具合に、「春秋経」は、ただ事実を記した歴史書であるときなしているため、けつして必要以上に穿った物の見方をしないのである。また「読春秋」は、序文の後に、朱子の説を引いて次のようにある。なお以下の文は、『朱子語類』卷八十三からの数箇所にわたる引用を黄震が一つにつなぎ合せたものであるため、一部、原文と字句の異同がある。

晦庵先生曰く、『春秋』の大旨は乱臣を誅して賊子を討ち、中国を内にして夷狄を外にし、王を貴びて覇を賤しむのみ。聖人は光明正大なり。応に一、二字を以て人に褒貶を加うべからず。直に其の事を書すに過ぎず。

善なる者、悪なる者、了然として自ずから見る。又た曰く、目前の朝報におけるや尚お朝廷の意を知らず、況んや千百載の下、遂に千百載の上の聖人の意を逆推するをや。

つまり聖人の真意をいたずらに臆測するのではなく、「春秋経」をあるがままに読めば、そこに自ずと善悪が現われると言うのである。このように考えれば、当然、「褒貶」「凡例」の説は完全に否定されることになる。先に挙げた程端学『春秋本義』の自序において、黄震は「褒貶」「凡例」の説を批判する一人とされていたが、その背景にはこの朱子のいわゆる「春秋直書説」があったのである。そして「褒貶」「凡例」の説を否定することは、「読春秋」における重要な課題の一つであり、序文にもその旨をはっきりと述べている。

「褒貶」「凡例」の説 興りて自り、『春秋』を読む者 往往にして聖經を穿鑿し、以て其の所謂「凡例」に合

わんことを求む。又た「凡例」を變移して、以て其の所謂「褒貶」に遷就せんとす。……是れ則ち義理を以て聖經に求むるに非ず。反て聖經を以て凡例を積するものなり。聖人 豈に先に凡例有りて、後に經を作らんや。何ぞ乃ち一一經を以て凡例に合わんことを求むるか。……愚 故に私かに先儒を無い、凡そ「褒貶」「凡例」を外にして、『春秋』を説くものは、之れを集録す。

さてこのように黄震が、「春秋經」はあるがままに読むべきであるという朱子と同様の理念を持っていたことは確かである。ところが汪惠敏『宋代經学之研究』（民国七八年、師大書苑有限公司）は、黄震の「読春秋」を評して「伝を棄て經に従い、直に經を以て解する」ものとしている。だが黄震が実際に「読春秋」を撰じる段になって、はたして「伝」の助けを借りることなく、直接、「春秋經」だけを読んでいたのであろうか。

三、「經」を以て「經」を解す

そこで先ず『四庫提要』に拠つて、程端学に至るまでの春秋学の大きな流れについて確認してみたい。『四庫提要』卷二十八の程端学『春秋三伝辨疑』に對する解題に次のようにある。なおここに述べるように、宋代以後、「春秋三伝」をどのように扱うかということが春秋学における主要な問題となる。

蓋し三伝を信ぜざるの説は啖助・趙匡に溯さかまる。其の後、析わかれて三派と為る。孫復『尊王發微』以下は、伝を棄てて伝を駁さざる者なり。劉敞『春秋權衡』以下は、三伝の義例を駁する者なり。葉夢得『春秋讞』以下は、三伝の典故を駁する者なり。端学に至りては、乃ち三派を兼ねて之を用い、且つ併せて『左伝』を以て偽撰と

為し、本を變ずるに厲を加え、其の安きを顧みる罔く、是に至りて横流極まれり。

先ず「三伝」を批判の対象とし、一家の師法にしばらくはばられることなく、三家を同列に扱い始めたのは、啖助・趙匡・陸淳のいわゆる唐末の「春秋三子」からである。これ以後、「伝」にしたがって「経」を読むのではなく、それぞれの「経」に応じて適切な「伝」を選択できるようになった。陸淳『春秋集伝纂例』について『四庫提要』巻二十六は、「蓋し伝を捨てて経を求め、実に宋人の先路を導く」とある。

この考え方を極端なまでに推し進めたのが孫復『春秋尊王發微』である。まさに先の『四庫提要』の解題に、「伝を棄てて伝を駁さざる者」とあるように、孫復は「三伝」の解釈に全く拠っていない。また『四庫提要』巻二十六は『春秋尊王發微』に対して、「〔孫〕復の論、上は陸淳を祖とし、下は胡安国を開く……深求に過ぎて反て『春秋』の本旨を失なうは実に〔孫〕復に始まる」と述べる。ちなみにこの孫復と胡安国とこそ、宋儒の中でも、とりわけ『四庫提要』の批判を受ける人物である。汪惠敏氏も、『四庫提要』において、この両者と少しでも関わりをもつものは、ことごとく批判を受けていることを指摘している（前出『宋代經学之研究』）。その結果、程端学『春秋本義』は、孫復の「有貶無褒」の説を継承している点は非難されるが、その一方で、『春秋胡氏伝』に対して批判的である点はよしとされる。こうした『四庫提要』の類型化された評価の仕方については、再検討の余地があると思われるが、ここではしばらく『四庫提要』の評価に従うこととする。

さてこの孫復の考えに歯止めをかけたのが劉敞および葉夢得である。諸橋轍次『儒学の目的と宋儒の活動』（『諸橋徹次著作集』第一巻、昭和五〇年、大修館書店）は、孫復の「尊王論」から胡安国の「復讐論」へと転じていく

一派に対して、劉敞・葉夢得を「春秋経解の帰正を求める一派」としている。以下、『四庫提要』卷二十六の両書に對する解題を引用すると、劉敞『春秋權衡』には、「三家の得失を平かにす。……礼に遯おくよかきが故に是の書の諸説を進退するや往往にして経に依りて義を立つ。(孫)復の意もて断制を為すに似ず」とあり、葉夢得『春秋獻』には、「三伝の是非を抉摘し、経を信じて伝を信ぜざるを主とし、猶お啖助・孫復の餘波に沿うがごとし」とある。両書の内容は、いずれも三部に分れ、各「伝」についてそれぞれ議論を行なっている。つまり両書は、「伝」と「経」とを同等のものとして、両者をはっきりと区別し、「伝」に関する問題を「経」とは別枠にして処理しているのである。なおこうして「経」に對する注釈として適切なものが選択され、その成果を取めたのが、劉敞『春秋伝』および葉夢得『石林春秋伝』である。しかし両者は、「伝」を「経」に對する注解とみなすものの、依然、「伝」を他の諸注解、例えば宋儒の新しい注解などと同等に並べるようなことはしていない。

それでは黄震の「説春秋」はどうであろうか。既に述べたように、「説春秋」は「三伝」を初めとする古今の注解を取りまぜて採用している(本稿第18頁)。つまりここに至って、「伝」が完全に他の諸注釈と同等に扱われるようになったことが分る。既に述べたように、汪惠敏氏は、「説春秋」を「伝を棄て経に従い、直に経を以て解する」ものとしている。しかし「説春秋」が「伝」を注解の一部として、「左氏曰」などと引いている以上、「伝を棄てて伝を駁さざる」孫復とは明らかに一線を画している。また劉敞や葉夢得のように、特別に「三伝」だけを採り上げて論じる系統にも属さない。あるいは汪氏の言う「伝を棄てる」とは、「伝に注解しない」という意味とも考えられる。だがそうすると宋儒の『春秋』の注解の大半がこれに該当することになる。おそらく汪氏は、黄震がとりたてて「伝」に注解していない点に加えて、その学問的背景に朱子の「春秋直書説」があるというような周辺事情から

判断して、「読春秋」を「伝を棄てる」ものとしたのであろう。

あるいは汪氏が言うように、黄震は、「伝を棄てる」というような意識を持って、「春秋経」に注解していたかも知れない。だが「読春秋」の中には、一見すると「伝」に全く拠っていないように見えるが、その実「伝」を棄て切れていないものがある。例えば襄公三十年の「五月甲午、宋災あり。宋の伯姫卒す」について、黄震はただ「伯姫 傅母の不在を以て宵に堂を下らずして火に逮びて死す。蓋し寧ろ死すとも其の節を失わず」(『黄氏日抄』卷十)とだけ記している。注目すべき点は、黄震が、「宋の伯姫は傅母がいなかったため屋外に逃げ出さず焼け死んだ」という、先の経文だけからではおよそ推測できない伯姫の行動について論じている点である。これは「伝」を読んでこそ出てくる議論であるが、それを何故あえて、例えば「左氏曰」などとして、出拠を明記しなかったのだろうか。それはおそらく黄震が理念としては、「伝」に拠らず直接に「経」を読もうとしたものの、「伝」の記事というものが、当時の文人の共通理解として黄震の中にすでに潜在していたためではなからうか。その結果、「伝」の記事は、自説の中に、あるいは意識的に隠蔽され、あるいは無意識の内に埋没していったのである。例えば『春秋本義』も、『左伝』を偽作としながら、『左伝』の事蹟は即ち衆説の中に参錯する(本稿第20頁)という事態が生じている。おそらく宋代以降、このような用例は、「読春秋」以外の他の注解の中にも、かなり見られると思われる。

四、おわりに

宋鼎宗『春秋宋学発微』(民国七二年、文史哲出版社)も、漢代春秋学と宋代春秋学との相違点の一つとして、「漢学は伝を重んじ、宋儒は経を尊ぶ」ことを挙げている。だがこれは、けっして〈宋儒が伝を軽んじた〉ということ

ではない。なるほど表面的には、従来のように「伝」を事々に取り上げず、一見すると「伝」を棄てているようにも見える。だが実質的には、「三伝」の説が、「経」と同様、今更、出拠を明記する必要がないほど、宋儒の春秋理解の中につきかり浸透した結果であるとは言えないであろうか。こうした宋儒の文人としての意識は、今日の我々のような、経文から現代の研究者の説に至るまで、すべてを同等の〈資料〉として一律に捉え、引用の際には必ずその出拠を明記するという文献実証主義的意識とはやや異なっているのである。

ともすれば宋儒の注解は客観性を欠いた非実証主義的な注解とされがちである。「読春秋」も、今日の視点から見ると、注解としての表記は統一性を欠き、その体裁はあるいは注解と言うよりも評論に近く、またその考証が不徹底なところもある。だが清朝の学者のように、音韻学・文字学・書誌学など、考証のための具体的な手段を持たない以上、「読春秋」も最終的にいずれの注釈を採用するかという判断は、あるいは黄震の主観にゆだねられることになる。しかし「読春秋」が、従来の「伝」に対する信仰を捨て、かつ極力、主観を排除すべく、可能な限りの諸本を突き合せて参考し、その出拠を極力、明記した点では、当時において、きわめて客観主義的な手法を用いていたと言える。朱子は「褒貶」「凡例」の説を批判して、「今若し必ず此くの如く推説せんことを要めば、是れ魯史の旧文を得て筆削の異同を参校するを須^キちて、然る後に見るべしと為す」（『朱子語類』巻八十三）と述べている。この朱子の主張などは今日の我々の文献実証主義的意識に極めて近い。「読春秋」の意識は、まさに古代における経伝崇拜の思想と現代人の文献学的志向との狭間にあつたと言えよう。

（文学部助手）